《修士論文要旨》

文学史にみる「蘇我入鹿」の人物像について

―近世文芸との比較論―

熊捕　つかさ*

「蘇我入鹿」という人物は、中臣鎌足や中大兄皇子によって暗殺された古代に生きた歴史の人物である。暗殺された理由としては、『日本書紀』に記されている次の言葉が主な原因であると考えられる。

> 鞍作[1]、天宗を盡し滅して、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代へむや

入鹿は天皇家を滅ぼし、帝位を傾けようとしていたからこそ、暗殺されたのである、と入鹿を殺した中大兄皇子は天皇に述べている。しかし、この中大兄皇子が殺した時、入鹿は最期の言葉として、「帝位につくのは天子であり、私は何もしていない」と入鹿は殺される理由もわからず、無実を訴えて死んでいる。『日本書紀』にはこのような事が記されているが、どうして蘇我入鹿は悪人とされたのだろうか。

蘇我入鹿が古代史において悪人とされているのは、この『日本書紀』の蘇我入鹿に関する記述と、中大兄皇子の言葉の影響が大きいと思われる。確かに、『日本書紀』をみれば、蘇我入鹿が悪人と思える記述もあるが、世に伝えられるほど目立って悪人というわけではない。『日本書紀』での蘇我氏については、入鹿のことよりも、父である蝦夷や、祖父である馬子に関する記述の方がたくさんあり、入鹿に関してはあまり描かれていない。しかし、歴史においては入鹿が悪人として有名である。それは、入鹿が中大兄皇子に暗殺され、大化の改新へとつながる歴史の事件に関わったことが原因のひとつとして考えられる。さらに、もう一つ考えられる原因がある。それは、蘇我入鹿を伝承する物語が中世・近世においていくつも作られ、伝えられたことである。それらの作品は、蘇我入鹿の悪人説として伝えられている。その中で、『妹背山婦女庭訓[2]』というのがある。この作品では、入鹿は悪人としておおいに描かれている。さらに、これは浄瑠璃として登場するも、大変な人気を集め、歌舞伎を経て現代にまで伝えられている。演劇として人々に幅広く知れることで、蘇我入鹿の悪人像というのは広がっていたと考えられる。

『日本書紀』を見ると、蘇我入鹿の人物像が分かる記述がある。

平成18年度　*文学研究科国文学専攻

蘇[3]我蝦夷を以て大臣とすること、故の如し。大臣の兒入鹿、更の名は鞍作。自ら國の政を執りて、威父より勝れり。是に由りて、盜賊恐懾げて、路に遺拾らず。

優秀であるが、盜人さえ恐れるような人物であった、とされている。後に書かれている盜賊さえも恐れた人物という表現は、入鹿が悪人であったと感じる部分である。このように、蘇我入鹿を『日本書紀』において描く場合、悪人だと感じられる表現がされている。『日本書紀』は勅撰による正史であることから、天皇家が殺した人物は、悪人として示されなければいけなかったのだろう。

古代の文献で、『日本書紀』以外に蘇我入鹿の事を記されたもので、『藤氏家伝』[4]がある。この『藤氏家伝』の中の『鎌足伝』において蘇我入鹿は登場をするが、ここでは『日本書紀』のように蘇我入鹿が悪人であると思える部分が少ない。「入鹿は暴虐である」という記述もあるが、悪人でないと思える部分がたくさんある。この『藤氏家伝』は藤原氏のことを記したもののため、中臣鎌足側の視点で描かれている。その中で、旻法師の堂に鎌足と入鹿が共に通っていたことが描かれている。ここでは、鎌足が優秀であった事を記すのと同時に、入鹿が優秀な人物であった事も同じように書かれている。この事は、門脇[5]禎二氏も述べており、入鹿の人物としての高い評価が取れる部分となっている。また、入鹿が暗殺される前の行動が記されており、そこでは入鹿の悪人としての評価は全く感じられず、むしろ、天皇にもきちんと仕えるような、良い評価が得られるような記述がされている、と感じられる文献である。古代においての蘇我入鹿は従来説である悪人と分かる記述も、悪人ではないと思える記述もある。

中世・近世の時代になると、蘇我入鹿の悪人説が流布したが、その中の『妹背山婦女庭訓』は、悪人である蘇我入鹿を中臣鎌足が倒す話となっている。この『妹背山婦女庭訓』は、入鹿の悪人説が伝承された作品というだけあって『日本書紀』に描かれたことが影響をしている、と考えられる部分がたくさん見られる。この中では、入鹿は悪人として描かれているが、また父である蝦夷も登場しており、蘇我氏は親子そろってかなりの悪人振りを見せている。『妹背山婦女庭訓』は江戸時代において大変な人気を集めた事は前述したが、それによって入鹿の悪人説は古代から遙か後の、近世にまで伝えられたのである。しかし、この『妹背山婦女庭訓』での中臣鎌足の行動というのを見ると、鎌足があまり良い人物ではないというのが見えてくる。この作品においては蘇我入鹿だけを悪人とみるのは考えなければならない。近世の物語では、蘇我入鹿が悪人として伝えられているが、それは、悪人を倒したから中臣鎌足が良い人とみえただけで、その動きというのは蘇我入鹿に似たものがある。

蘇我入鹿に関する記述は、どの文献を見ても悪人を表す言葉が目立つため、どうしても悪い人物だとされてしまう。しかし、中臣鎌足の動きを見れば、蘇我入鹿は単に、鎌足に利用されただけの人物ではなかっただろうか。蘇我入鹿と中臣鎌足のことを記した『藤氏家伝』に

おいて、あまり蘇我入鹿が悪く書かれていないのは、鎌足自身が自分と似た優れた人物であったのを認めていたからであろう。しかし、蘇我入鹿は優秀であったが、鎌足ほど人を見る目がなかった。もし、入鹿がそこまで優れた人物となっていたなら周りの人の動きなどから、鎌足の計画にも気づくことができたはずである。しかし、その前に鎌足によって倒された。鎌足は中大兄皇子に入鹿の暗殺を持ちかけて、蘇我入鹿を倒したことで、藤原一族への一歩を踏み出した。入鹿は鎌足に利用されただけである。だからこそ、『鎌足伝』で蘇我入鹿を良い評価も取れる描き方をしたのだろう。『日本書紀』に残された蘇我入鹿の言葉は本心から述べられたもので、本当の悪人は中臣鎌足であっただろう。

注

(1)『日本書紀』の原文は、『日本古典文学大系68日本書紀下』一九六五年七月五日発行、岩波書店、によった。以降『日本書紀』の原文は、『日本書紀』と記す。二六三頁、二行

(2)『妹背山婦女庭訓』は、『新編　日本古典文学全集77浄瑠璃集』二〇〇三年十月二〇日発行、小学館によった。

(3)『日本書紀』二六三頁、六行

(4)『藤氏家伝』は、『藤氏家伝　鎌足・貞慧・武智麻呂伝　注釈と研究』一九九九年五月二〇日発行、吉川弘文館によった。以降これについては『鎌足伝』と記す。

(5) 門脇禎二『蘇我蝦夷・入鹿』吉川弘文館、一九七七年、十二月十日。